【郷土史への扉】

山城が語るみぞべの歴史

溝辺城は、薩・隅・日の地理纂考（薩摩・大隅・日向の一部の地誌を編集したもので、明治十年ごろ完成）に「溝辺城ハ溝辺村（今ノ麓）ニアリ元弘ノ頃、溝辺孫太郎居城ナリ。事跡詳ナラス」とあります。溝辺城は、鎌倉時代の末期、後醍醐天皇（第九十六代）元弘二年（一三三二年）ごろ、溝辺孫太郎という豪族の居城（山城）として築かれたと伝えられています。

溝辺城は、昔から城山と呼ばれています。これは、江戸時代、薩摩藩の城の形態が「館造り」（地頭所）と「詰城」になっており、詰城のことを城山と呼んでいたためです。薩摩藩内には、城山という山城がたくさんあります。代表的なものは、鶴丸城に城山（鹿児島）・舞鶴城に城山（国分）などがあります。

城の形状は、南北約四百メートル、東西約五十メートルの細長い丘陵地で、北側から林道が内部に延びており、この辺りが城の入口と思われます。

この林道を奥に進むと、人力によってなされたと思われる切り通しの跡や、井戸と思われる跡が確認されています。頂部は、比較的平坦に土がならされ、いくつかの段状になっているなど、山城としての形状がうかがわれます。

肝付兼固の時代

時代は流れ室町時代の中ごろ、肝付越前守兼固が四千五百石を領する溝辺城主となりました。以来、子兼演とともに力を合わせ、溝辺郷の治世に励み、兼演の働きによって大永六年（一五二六年）には辺川（現加治木町辺川）を与えられました。

さらに、天文三年（一五三四年）には島津勝久から新しく加治木領を与えられ、溝辺、辺川、加治木を併領する領主となり、加治木城に本拠を移しました。この進出の時には、家臣十九家と、その他十八家の者たちを従えて加治木へ移動しました。

その後、肝付家は兼演―二代弾正忠兼盛―三代弾正忠兼寛―四代三郎五郎兼三まで四代の間、天文三年から文禄四年（一五九五年）までの六十一年間、溝辺、辺川、加治木の地域を治めてきましたが、豊臣秀吉の九州征伐の際、島津義久は秀吉に降伏し、その結果、加治木、溝辺、日当山は豊臣秀吉の直轄地となり、石田治部少輔三成がその代官となりました。文禄四年（一五六一年）、島津領内の所領替えにより肝付氏は薩摩国喜入、宮村、清水村の領主となって喜入に移ることになり、この時溝辺よりお供した家臣旧家と、さらに加治木の家臣たち多数を従えて移転しました。

溝辺城跡

瑞泉山心慶寺跡

瑞泉山心慶寺

瑞泉山心慶寺は、肝付越前守兼固が溝辺の領主となり溝辺城へ移転後、肝付家の菩提寺として建立されたもので、宗派は曹洞宗、福昌寺（鹿児島）の末寺です。本尊は地蔵菩薩で開山は心慶良信和尚（福昌寺五世）でした。兼固の父、肝付越前守兼光の「法名」心慶をとって名づけたものと思われます。

心慶寺の場所は、溝辺城の南西に位置し、水田を眼下に見る山の裾野にあります。地形から判断すると、少し山手に位置していたものが長い年月を経て、土砂崩れ等により現在の地に流れ出たものと思われます。

周囲は山林と化しているものの、三基の住僧の墓碑やその他の者の墓碑と、お寺の門前周辺にあったと思われる常夜燈の石燈があるなど、昔の名残を留め、廃墟の跡のむなしさと物寂しさを物語っています。

三基の住僧の墓碑のなかの一つが貫周という僧侶の墓であることが確認されています。

溝辺町郷土誌引用